

埋文よこはま21

- ▶ 埋文センター
移転記念増大号
- ▶ 紙面リニューアル!



元町貝塚の発掘

—山の手アメリカ山公園の縄文貝塚—

横浜の観光スポットの一つである元町通りを見下ろす丘の上に、かつて縄文人が住んでいました。このほど、みなとみらい線元町・中華街駅の上に立体都市公園「アメリカ山公園」がオープンしましたが、実はこの公園整備のための発掘調査によって、写真のような縄文時代の貝塚が発見されたのです。

現在、港を一望する観光スポットの地下に眠っていた縄文人の貝塚。5000年前に生きた彼らはここでいったいどんな生活を営んでいたのでしょうか。発掘の様子も交えてご紹介します。

→次項へつづく



新しくオープンしたアメリカ山公園

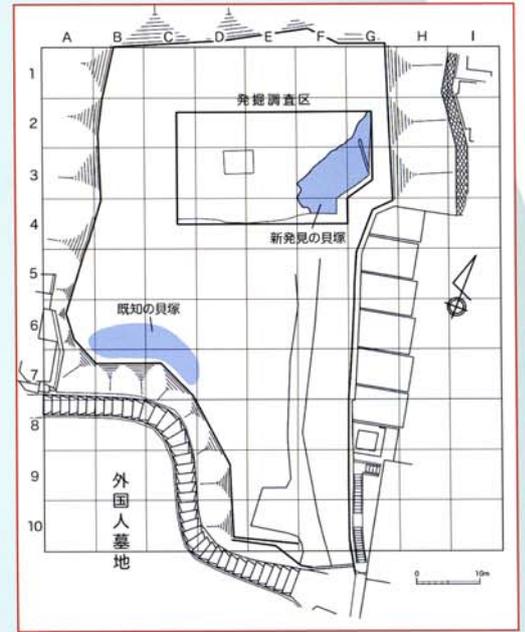
◆元町貝塚とアメリカ山公園

もとまちかいづか
元町貝塚のある山手地区は港の見える丘公園や外国人墓地などで知られる眺望の良い観光スポットです。横浜市では開港150周年記念を機に立体都市公園「アメリカ山公園」を整備する計画を立ちあげ、その工事に先立ち公園敷地内に存在した元町貝塚の発掘が平成18年1月27日～3月31日にかけて行われました。ちなみにこの場所は、幕末から明治の初期にかけてアメリカ公使館の用地として予定されていた土地だったようです。

◆2か所の貝塚

もともと元町貝塚として知られていた貝塚は、今回の調査区の外側、南西部の斜面にあり、そのまま保存されることになりました。今回新しく発見された貝塚は、従来知られていた貝塚の北東約30m、尾根を挟んだ北東部斜面にあり、東西7m南北18mほどの規模をもっています。この発見によって、元町貝塚は、南西斜面と北東斜面との、2か所の貝塚から成る遺跡であることがはっきりしてきました。

この2つの貝塚から出土する土器は、いずれも縄文時代中期前半(約5,000年～4,500年前)に属するものが中心となり、2つの貝塚は、ほぼ同時期に尾根をはさんで北西と南東の斜面に形成されたものと考えられます。



元町貝塚の二か所の貝塚

◆貝層の特色

貝層は、最も深いところでは1.5mを計り、大きく8層に分けることができます。ひとつの貝層の厚さは、10～40cmほどで、各貝層は明瞭な間層を挟んでいるため、新・旧複数の貝層によって形成されていることが、はっきりとわかります。出土した貝の種類は、アサリ・ハマグリ・オキシジミ・シオフキ・オオノガイ・ハイガイ・サルボウ・カガミガイ・マガキ・ツメタガイ・アカニシなどがみられますが特に目立つのはアサリです。

この場所から北側に見下ろす低地、現在の神奈川県庁舎から中華街にわたる一帯には、厚い砂層の堆積がみられ、元町貝塚が営まれた縄文時代中期には、砂底の浅い海が拡がり、アサリの好生息地となっていたようです。

◆出土土器と年代

貝層からは、縄文時代前期末から縄文時代中期中ごろまでの土器片が比較的多く見つかりました。主体となる土器は、平塚市の五領ヶ台貝塚から出土した土器を標式とする「五領ヶ台式土器」と呼ばれるもので、縄文時代中期前半(約5,000年～4,500年前)に属し、細い隆起線や半截竹管文・三角形沈刻文などの文様が特徴的です。



発掘中の元町貝塚を見学する子供達



貝層の中から出土した五領ヶ台式土器

◆さまざまな出土品

土器のほかに、石鏃(矢じり)・打製石斧・磨製石斧・礫器・敲石・石錘(重り)・石皿・磨石・石匙などの石器類、シカの角などを素材とした、釣針・ヤス状の刺突具・ペンダント・ヘアピン・骨刀などの骨角器、貝輪・貝刃などの貝製品のほか、食糧となったイノシシ・シカをはじめとする動物の骨も多くみついています。また、珍しいものでは、「糞石」とよばれる、動物の糞が化石化したものも発見されています。



出土した貝製品▶

- 1 カガミガイ製貝刃
- 2 ハマグリ製貝刃
- 3 イタボガキ製貝輪
- 4 アカニシ製貝輪



元町貝塚の石器

- 1・2 石鏃(矢じり) 3～5 打製石斧 6 磨製石斧
7 石匙 8・9 石錘



貝層から出土したクジラの骨



元町貝塚の骨角器

- 1・2 釣針 3 ヘアピンの頭部 4～6 刺突具



骨角製ペンダント(表・裏) 貝塚から出土した糞石

◆謎の骨

今回の発掘の終了間際、貝層の南端で、非常に大型の骨がみつかりました。幅20cm、長さは1mを超えるもので、大型のヒゲクジラ類の下あごの骨であることがわかりました。元町貝塚の人々は大型のクジラの捕獲も行ってたようです。

◆集落はどこに？

今回の調査では貝塚をつくった人々の住居などの生活の場の跡は発見されませんでした。どうしてでしょうか？

一つ考えられることは縄文時代中期前半の五領ヶ台式土器の時代の竪穴式住居は総じて浅いものが多いということです。元町貝塚の二つの貝塚のあいだの丘陵頂部に集落があったと推定できますが、ここは後世の造成などで削られている可能性が高いということです。

もう一つは五領ヶ台式期の集落は規模の小さいものが多く、若干の竪穴住居址しかない可能性があり、今回の調査区の範囲外にしか住居がなかったのかもしれない。

いずれにせよ、貝塚を残した縄文人たちはこの丘陵で、5000年前の横浜の海を眺めながら生活していたと考えられます。

埋蔵文化センターが移転、リニューアルオープンしました



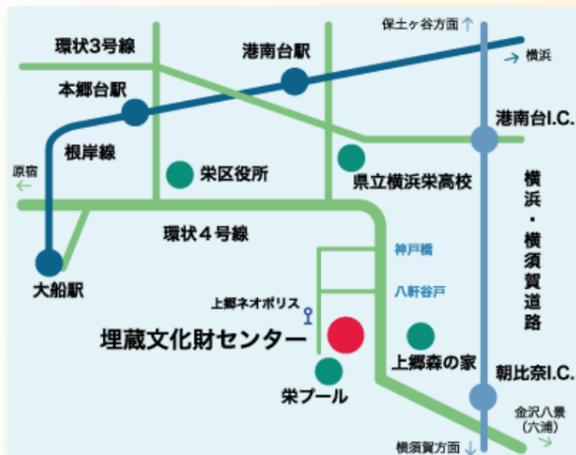
正門から見た埋文センター



埋文センターの外観

埋蔵文化財センターの主な業務

- ・市内公共事業の発掘調査・整理報告
- ・港北ニュータウン遺跡群の整理報告
- ・企画展・講座・体験学習などの開催
- ・広報紙の刊行
- ・その他市内の埋蔵文化財に関すること



埋蔵文化財センターの位置

※交通の詳細は最終頁を参照してください。

(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターは平成21年11月に横浜市南端の緑豊かな地、栄区野七里に移転し再出発することになりました。

これまで市内各地の収蔵庫に分散していた遺跡出土品も全て一か所に集められ、出土資料をより身近に利用しやすくなりました。

引きつづき横浜市の埋蔵文化財業務を行ってまいりますので、どうぞ変わらぬご愛護をよろしくお願いいたします。



整理室 (A棟 1F)

出土品の基礎整理のための部屋。土器や石器などの出土遺物の注記・接合・復元・図化などの作業を行います。



収蔵室

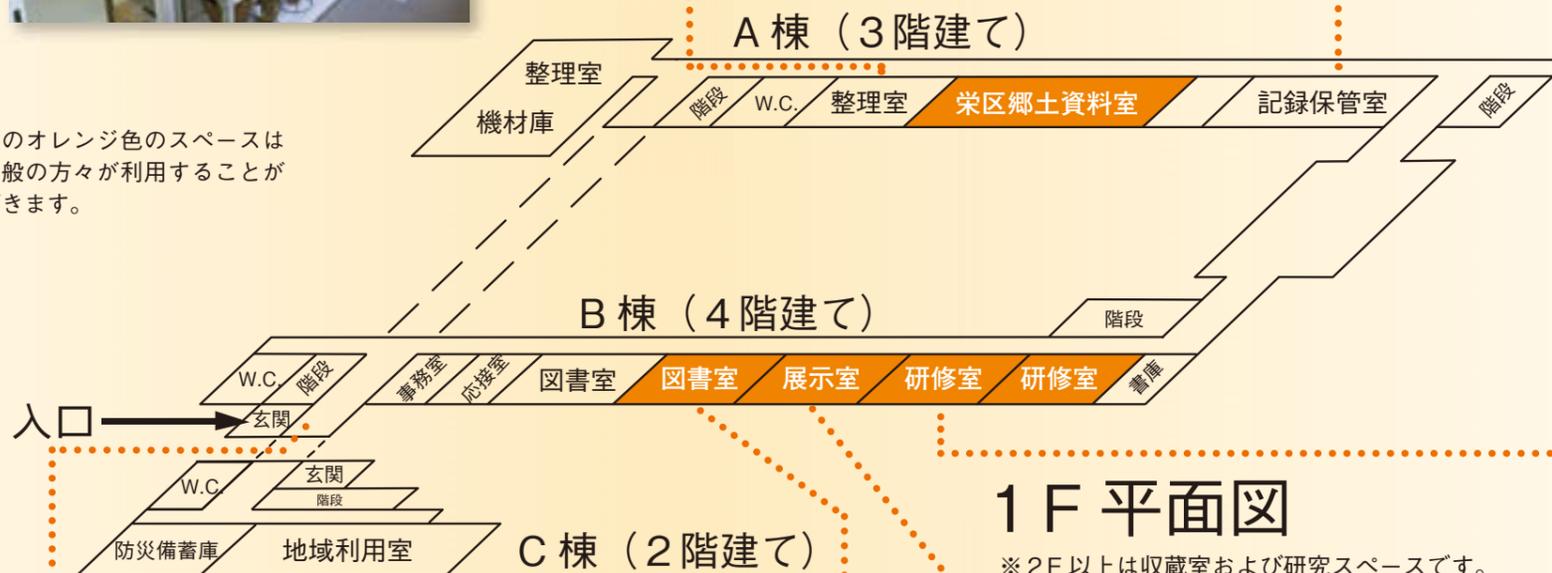
(A棟 2～3F、B棟 2～4F、C棟 2F)
施設内の半分以上を占めるのが収蔵室。およそ3万箱の出土品が収蔵されています。



記録保管室 (A棟 1F)

発掘調査の際に作成した図面・写真・日誌などの記録類を保管する部屋。発掘の記録類の管理も大切な仕事です。

図のオレンジ色のスペースは一般の方が利用することができます。



1F 平面図

※2F以上は収蔵室および研究スペースです。



エントランス展示

玄関正面には、主に市民の方々からご寄贈いただいた資料を展示しています。



図書室 (B棟 1F)

全国から送られてくる発掘報告書等の考古学関係の図書類が保管されている部屋。一般の方も閲覧できます。



展示室 (B棟 1F)

横浜市内の遺跡をパネル・出土遺物を交えながら展示しています。職員がわかりやすく解説します(要予約)。



研修室 (B棟 1F)

多目的スペース。勾玉づくりなど、楽しい講座を開催していますのでぜひご参加ください(HP等参照)。



調査研究室 (B棟 2F)

主に専門職員が業務を行う部屋。書類作成・図面整理・報告書の編集など幅広い作業を行います。

エントランス展示からの資料紹介 —市民の方々からの寄贈資料—

土器や石器など考古学の資料は、畑の耕作や工事などによって、発掘調査によらずに発見されることがままあります。そして運よく、心ある市民の方がそうした資料を回収してくださっている場合がありますが、そのような資料の中にも発掘された資料におとらず、歴史を語る上で大変貴重な資料となりうるものがたくさん含まれています。

そこで、埋蔵文化財センターの新施設では、エントランスを利用して、市民の方々からご寄贈いただいた考古資料を展示することにいたしました。

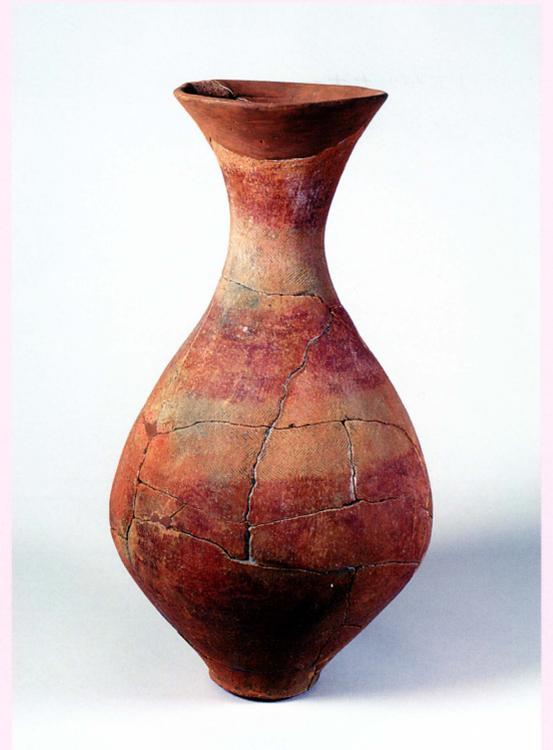
今回はその中から、金子仲枝さんからご寄贈していただいた資料をご紹介します。

金子仲枝氏寄贈資料

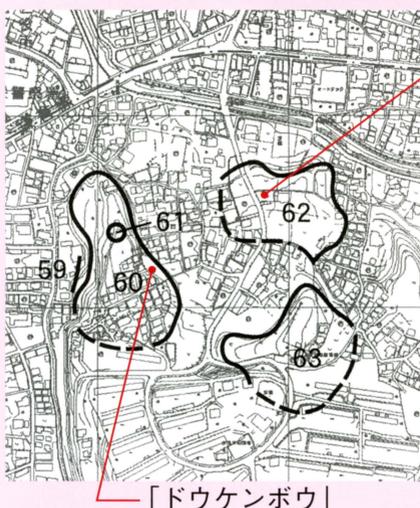
金子仲枝さんからご寄贈いただいた資料は、横浜市栄区^{くでん}公田町の周辺の二つの畑から出土したものです。

まずひとつめの畑は「ジゴギリ」と呼ばれていた畑で、農作業中に地表の約1m下から右写真のような赤く塗られた壺が出土しました。口縁の部分だけ欠けていますが、全体的に破片の残りがよく、全体の形を復元することができました。比較的小さな口から細い^{くび}頸を経てなだらかに胴部に移行する、大変優美な造形が特徴的です。また、頸部と胴上半部には二帯の縄文帯がめぐっています。このような特徴から、この壺は弥生時代中期後半という時期に南関東一円に分布した「宮ノ台式土器」と呼ばれる土器の仲間であることがわかります。今からおよそ2000年前の土器が偶然耕作によって再び地中から顔を出したのです。

壺が出土した畑の位置は現在「桂台北遺跡」の範囲となっています。発掘による出土品ではありませんが、土器の残りがよく、大変貴重な資料と言えます。



「ジゴギリ」出土の壺 弥生時代中期 高さ39cm



「ジゴギリ」

◀遺物が出土した畑と周辺の遺跡

- 60 公田ジョウロ遺跡
- 62 桂台北遺跡
- 63 桂台遺跡

「ドウケンボウ」

もうひとつの畑は「ドウケンボウ」と呼ばれていた畑で、先の「ジゴギリ」の南西約200mに位置します。この畑からも農作業中に考古遺物が出土しました。縄文土器片が多かったのですが、その中に右上の写真のような石の矢じり（石鏃）が混じっていました。三角形や五角形のものや小さな飛行機のような形など様々なものがあります。同様な組み合わせの石鏃群は近隣の桂台遺跡の調査でも出土しており、縄文時代晩期の土器が伴うことがわかっています。材料に「チャート」と呼ばれる石材を多用することも、この時期の特徴と言えるでしょう。

これらの石鏃が出土した畑は現在「公田ジョウロ遺跡」として周知されています。



「ドウケンボウ」出土の石鏃 縄文時代晩期 右下：長さ3.2cm
左上3点：黒曜石製 右側13点：チャート製 左下6点：他

よこはまの遺跡 栄区上郷深田遺跡

上郷深田遺跡は港南台駅の南方約1kmの地点、横浜市栄区にある山手学院南側の丘陵斜面に位置する遺跡です。古くから、俗称で「カナクソ」と呼ばれる鉄クズが拾える場所でした。「カナクソ」とは正確には鍛冶や精錬を行う際に残余物としてでる「鉄滓」のことで、何らかの鍛冶関連の遺跡として考えられてきたのです。

昭和60年に、横浜市により遺跡のある場所に都市計画道路の建設計画がもちあがり、翌年には発掘調査が行われました。遺跡が立地する緩やかな斜面は上下2段に造成されており、眼前には小さな谷に水田が広がっています。発掘の結果、上下段ともに多数の遺構が切り合っている状態が確認されました。調査面積は最終的に1,270㎡におよびました。

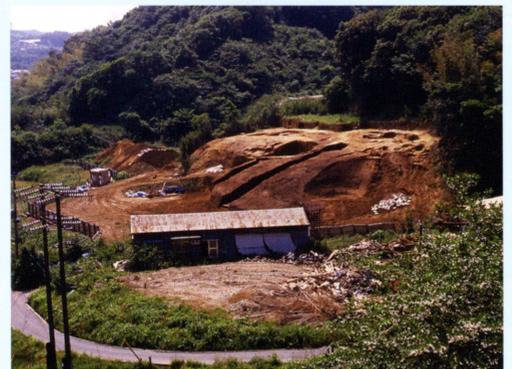
どのようなものが見つかったのでしょうか。まず、浅い楕円形の土坑（穴）で底が赤く焼けたものが多数見つかりました。どうやら鉄を精錬するための炉で、この中からは一定の厚さで鉄分と土が固まった「炉壁」が見つっています。当遺跡では18か所の製鉄炉のほかに1か所だけ製銅炉がありました。

炉の他に方形の浅い竪穴がいくつか見つかり、竪穴式の建物が数棟建っていたことがわかっています。作業小屋でしょうか。どうやらここは製鉄に関する工房があったと言えそうです。炉に風を送る「フイゴ」の羽口や工人たちが使用した土器も出土し、また、原料の砂鉄も竪穴のうちのひとつから大量に見つっています。この付近の古い地層にはこうした砂鉄がふんだんに含まれており、谷底の水田にも流れ出ていることが発掘の担当者により確認されています。土器の年代から、これらの工房は7世紀中葉（古墳時代終末期）～9世紀前半（平安時代）に至る200年間にわたって営まれていたと考えられています。

遺跡は現在道路となっていますが、遺跡の一部はあえて調査せずそのまま道路下に保全されています。



遺跡の位置



調査終了時の遺跡遠景



◀ 調査途中 の製鉄炉

土層観察用のベルトが残っている状態
焼け土と炭化物の堆積がみられる



炉跡から出土した炉壁

企画展 西洋館とフランス瓦

—横浜生まれの近代産業—

2010年1月23日(土)～5月9日(日)

会場：横浜都市発展記念館 みなとみらい線日本大通り駅3番出口0分

休館：毎週月曜日(ただし、3/22・5/3(月)は開館、3/23・5/6(木)は休館)

詳しくはホームページで！ <http://www.tohatsu.city.yokohama.jp>

開港以後、新しい街並みの主役となった洋風建築を特徴づけたものは、それまで日本にはなかった煉瓦や西洋瓦(フランス瓦)などの建設材料でした。

幕末に来日したフランス人実業家アルフレッド・ジェラルドは、横浜山手に瓦工場を建設し、日本で初めてフランス瓦の製造に成功します。ジェラルドの工場は蒸気機関を備えた近代設備を誇り、彼の名前を刻んだフランス瓦のほか煉瓦や土管を製造していました。ジェラルドの瓦は、横浜居留地を中心に多くの西洋館の屋根を彩りましたが、その範囲は横浜にとどまらず東京方面にも広がっていたことが、各地の発掘調査から判明しつつあります。

本展示では、フランス瓦誕生の地である山手のジェラルド工場を中心に、洋風建築の広がりの背景にあった黎明期の近代産業のすがたを紹介します。

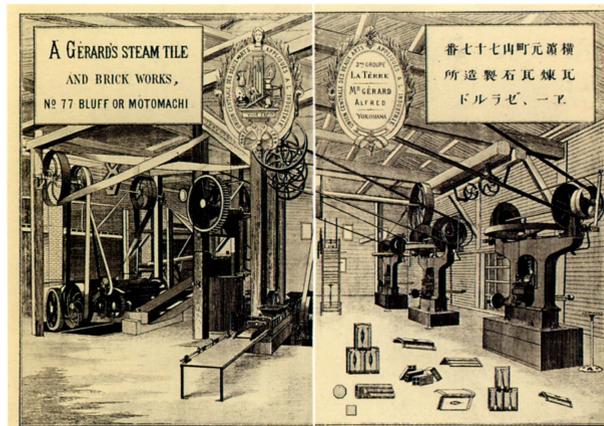


アルフレッド・ジェラルド(1837-1915)
(コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所蔵)



◀ジェラルド瓦の裏面
ジェラルドの文字が見える
(横浜都市発展記念館所蔵)
※瓦を屋根に葺いたときの上下で
写真を展示しています。

ジェラルド工場(銅板画)▶
『日本絵入商人録』より
(横浜開港資料館所蔵)



主催：横浜都市発展記念館、(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター、横浜市三殿台考古館

共催：横浜市教育委員会

埋蔵文化センターのご案内

JR根岸線「港南台」駅

2番バス乗り場より神奈中バス港36・37・86系統「上郷ネオポリス」行き、または港40系統「栄プール」行き、「上郷ネオポリス」下車 徒歩1分

※バスの標準乗車時間は約16分(道路状況によってことなります)

京浜急行「金沢八景」駅

国道沿い1番乗り場より神奈中バス金24・25系統「上郷ネオポリス」行き、終点「上郷ネオポリス」下車 徒歩1分

※バスの標準乗車時間は約21分(道路状況によってことなります)

- ・見学等の施設利用は、平日の9～17時となっています(受付16時まで)。
- ・施設利用にあたっては、事前にご連絡ください。
- ・とくに団体見学の方は事前にお申し込みください。他の催し物との重複、多人数の場合調整させていただく場合がございます。
- ・収蔵図書の一部閲覧およびコピーサービス(有料)を行っています。

「埋文よこはま」は横浜市域で発掘調査された遺跡や出土した遺物を紹介する広報紙です。

埋文よこはま21

発行日 2010年2月28日

編集・発行 財団法人 横浜市ふるさと歴史財団
埋蔵文化財センター

〒247-0024 横浜市栄区野七里2-3-1

TEL. 045-890-1155

FAX. 045-891-1551